

公開シンポジウム

エボラ出血熱対策の現状と治療・診断法の開発



ーフランスと日本の取組み

開催日程：平成 27 年 6 月 7 日（日）13：30—16：30

開催場所：聖路加国際大学・アリスホール

〒104 - 0044 東京都中央区明石町 10-1

これまで発生した 20 回余りの感染アウトブレイク各症例数の合計を上回る感染症例数の報告を示した今般の西アフリカ地域でのエボラ出血熱。

リベリア国境に近いギニア・メリアンドウという森林地域で最初の感染症例が確認されたのが 2013 年 12 月、その周辺の感染は一時期食い止められたといわれていたが、3 月に症例が急増した。その後、西アフリカ地域では雨季を迎え、エボラ出血熱感染源への暴露リスクが高まり、感染者急増に見合う医療施設、医療スタッフ・リソースの絶対的な不足、それにとまなう医療サービスの質的・量的確保の困難さ、医療支援者の二次感染等、さまざまな感染拡大ルートを通り、人々はエボラウイルスの脅威をあらためて思い知らされる状況となった。「今回のエボラは簡単には制圧できない」、感染流行地でのパニックが高まる中、様々な情報チャネルを通じて国際社会への警笛が鳴らされ始めた。

ギニアとは歴史的に深いつながりをもつフランスでは、誰も経験したことのない現地での臨床研究と治療法開発へ向けた動物実験の並行実施という先進的取組みを決断し、欧州関係研究機関の連携活動を牽引することとなった。一方、国際的な研究開発市場において、また公衆衛生対策上の取組みとして多くの治療対策が講じられる中で、エボラ出血熱に対して本邦開発医薬品および診断方法がポテンシャルを示している。

これから現地ではまた雨季を迎える。「感染者ゼロ」を目指し、また将来のアウトブレイク鎮圧に備えて動き出した国際的な研究開発・実践対策連携と、それを支える日本の産官学協力の重要事例を紹介する。

予定プログラム（日英同時通訳あり）

開会のご挨拶 福井 次矢 聖路加国際大学 理事長

（敬称略）

導入講演

「2014 年のエボラ出血熱感染拡大の経緯（仮題）」

齋藤 智也 国立保健医療科学院

「ウイルス RNA ポリメラーゼ阻害剤 ファビピラビル（T-705）-研究開発の経緯-」

古田 要介 富山化学工業(株)

招待講演 「Issues in evaluating experimental therapeutics for containment of EVD outbreaks」

（エボラウイルス疾患アウトブレイク鎮圧に向けた治療薬の研究評価における課題）

Denis Jean Marie Malvy（デニス・ジャンマリー・マルビー）

ボルドー大学 医学部熱帯保健医学研究所・医療センター感染症熱帯病部門 教授

フランス国立保健医療研究所（Inserm, Unit 897）永久上席研究員

Claire Levy-Marchal（クレア・レヴィマーシャル）

フランス国立保健医療研究所（Inserm）・臨床研究部門 統括・上席研究員

研究成果報告

「エボラ出血熱の迅速診断法（RT-LAMP 法）の開発とギニア展開」：安田 二郎 長崎大学 熱帯医学研究所

指定発言と討議（コーディネーター 竹内 勤 聖路加国際大学）（詳細未定）

開会のご挨拶 岩本 愛吉 日本医療研究開発機構 科学技術顧問

